大正十二年十二月二十四日第三種郵便物認可 毎月一回十五日發行
大正十四年七月五日印刷納本 大正十四年七月九日發行

43

光

第四十三輯

大正十四年七月

◆心の屑籠……西田天香
◆無相無縛の境涯へ……谷口雅春
◆友よ一所に祈つて下さい……八田勝三
◆讃光錄……中田美穗
◆蔭に泣く人……すずき五ろう

同人 懺悔報恩の奉仕者
祈願 不二の光明によれる生活
費用 供養されたる淨財

◆お光の導きを受けて……谷口光
◆東濃講演行脚……若林正
◆天香師御來岡の事ども……照朗記
◆鹿ケ谷より……みかみ
◆東京に於ける自由勞働者問題……松下吉衞

一燈園・宣光社

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

光明祈願（暫定）

不二の光明は宇宙に遍滿する陽光の如し。物あり、之に觸れて色々の光を發す。光明祈願は即ち起稿者識界の現象に過ぎず。添すべく、削すべく、正さゞる可らず、改作また不可なし。暫定と名づくる所以なり。

不二の光明によりて新生し許されて生きむ。

我等は先づ不二の光明によりて復活新生し、神に委ね佛に養はれ他に障りなき生涯を送らざる可からず。

諸宗の眞髓を禮拜し歸一の大願に參ぜむ。

内外古今諸宗の眞髓を禮拜すれば、歸一の大願は正に左の如くなる可し。

通願　皆倶成就大圓覺

別願　將來世界眞平和

別に一宗を立てず、單に一宗に偏らず、古今聖者の光を仰ぎ德を頌し、その遺されたる事業を成就せんことを期す。

懺悔の爲に奉仕し報恩の爲に行乞せむ。

世間一切の罪惡苦患、何人かその責を脱るゝことを得べき。願くば常に懺悔の心を持して十字街頭に奉仕し、菩提心によりて行乞し、以て法界成就の本願に副はんことを。

法爾の清規に隨ひ世諦を成ぜむ。

天眞法爾の戒相に則り、六度の行願に隨ひ、治生産業に即して眞道を行じ、永久眞平和を將來すべき生活法を實證し、以て在家俗諦を成就せんことを期す。

即ち天華香洞に歸り無相の樂園に逍遙せむ。

達觀すれば實にも此世は寂光の淨土、妙樂の天國、文明の隆興も進化の事象も乃至清規戒行も、此の見地よりすれば即ち一の遊戲三昧に過ぎず。憾むらくは個中の消息、もとよく言辭の擧解し得る限りにあらざるを。暫らく此の實相に名けて天華香洞といふ。天華香洞の門、假りに名けて一燈園となす。道に志して尙自ら立つ能はざるもの、乃至老、病、幼者等の爲めに設けられたる一の化城とも見る可し。その存立は喜捨の淨財に成り、在園はその清規を守ることによりて許さる。

天華香洞に立ち、信託を受けたる財物事業の整理經營等に從ふを假りに名けて宣光社といふ。宣光社の目的は世間の執迷紛爭葛藤を根絶し、以て齊家、治國平天下を期するにあり。

天華香洞と一燈園と宣光社と、三位にして一體、通じては即ち無相不二。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

心の屑籠

西田天香

愚痴をいふのではない。世をあざけるつもりで書くのでもない。日々聞かしてもらふ問題や、もらう手紙や、扱はせてもらう人事のうちで、肩のこる樣なことを除いて、皮肉でもあり又おかしくもあり、深い眞理動かぬ事實、そして手近いことで最嚴かな感じのする談片事端を書かせてもらふて見る。いはゞ自分の心にたまつた屑籠から、捨てしなに一寸ひろひあつめたものに過ぎない。

此あつめたものに種目の名を與へるならば『まわり遠い今の文化』とでも題して見たい。

今から二十五年も前のことでしたが、フット「發明」といふことについて、白玉(しらたま)の茶碗を持ちながら感じたことがあつた。それは何の因緣かはわからないが、その無きずの純白の茶碗を自分が破つたとする、隨分細かく破れてその破片が散らばつた。處が自分が破つたことだけは忘れてゐる。自分が破つてゐるにちがいはないが、破るのが當然の樣にそだてられ敎へられたのか、それには少しの疑問も持たぬ。そうしてその散亂してある澤山な大小の破片を見つめてゐる。それには數多い不調和が見へる。考へのよいものが一つ二つの破片をもつてつぎあわせて見る。根(こん)よくやるとキチットあふことがある。又やるうちに又一つがあふ。こふしたことを何か新らしゐ發明をしたかの樣に思ひ、得意がり

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

かしこぶり、また世間の賞讃を博するとしたらどうかと思ふて見た。それははなれ〴〵になつてあつたものが相手を得てつぎあつたら發明でもあらう調和でもあらう。少しの水でもすくへる樣にでもなるならば非常な驚異的發見ともならう。しかし乍らそれがもとの純白無きづの白玉の原形になるのは容易でない。自分は破れたものならつぎ合はさねばならぬとおもふ、からしてその努力に敬意を表するは當然であるが、更らに大切な事は始めから破わさぬことであると思ふたのであつた。極微な細片をももらさずあつめてつぎ合せても恐らくはもとの無きずになり得ないだろう。たとへなつても、破らない方が尙美しい。既に破れたものをつぎ合はすことは必要ではあるが、新らしいものを破らない事はさらに必要である。前の破れたものをつぎ合す爲めに新らしいものを破るのは尤愚かな事であると思ふたことであつた。今の文化とか進步とか發明とかを見たり聞いたりする度びに、自分は驚いたり感心したりするはたから、淋しい氣の毒な感じもする。それは丁度茶碗のかけをひろひ合せて喜ぶ程のことであると直覺するからである。飛行機潜航艇ラヂオ毒瓦斯と色々のものが出來る。それが丁度少しのくぼみがそのつぎ合せたそれ〴〵のものに出來て、やゝ水でも入れるやうに出來た程のものしか思へない。そうした發明の出來る度每にその惡用をも怠らゐで、人類相殺の道具に用ひんとし、用ひられ、爲めに互ひの恐怖の種になるならば、丁度新らしい茶碗を破はして古い破片にあわそうとするにも似てゐる樣に思はれる。

　つぎ合せやうとするはたから、その能率よりもまだ高い能率で新らしい茶碗を破わしてゆくものとしたらおかしなものでないか。大切にして破らないものには文化を知らないもの、破つて僅かにつぎ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

合せたものが文化を知るものであるとなつたらどうであらう。完全になるのは遠い未來であるとすましきつて、己れが破つた罪をわびずに、ついだ功のみに心と生活を高ぶつたとすればどうであらう。自分は思ふ、たとへ人間が勝手に都合のよい事ばかり考へて、妙な自畫自讃をやつてゐても、結局全體は落付かない、決して理想は實現しない、遠く待つても理想は實現するものでなふて、反て逆轉してゐるのであると云ふことを。破つた茶碗でたとへると理想の實現はもとの無きずの茶碗になることである。人類の理想は人類が一番一切とゝもに幸福になることであるとすれば、今の方角にすゝみゆくことは理想の中心よりはなれ去つてゆく事の樣に見える。破けたものを合すのをはなれ去るとはいわぬ。一番完全なものをまづ見付けるがよい。それを見付けたら新らしいものを破らぬがよい。既に破つたものに對しては懺悔をするがよい。新らしいものを破つて古いものをつごうとせぬがよい。己れが破つたことの懺悔のためにつぎ合せ報恩の爲めによせ合せ、そうしてその合せたことにほこつた心と生活のぜいたくをせぬがよい。發明にほこりその報償を得るならば、破はしたことを如何にするかを考へるがよい。こふさへ考へるとたとへ全部を他の新らしい犧牲なしにつぎ合せたものであつても、謙遜と下坐とを忘れてはならない事になるのである。

此茶碗の例によると、あまりにはつきり自然と人智の地位關係がわかる。茶碗は例にとつたまでの事であるから、『その茶碗も人智で造つたものでないか』と云ふ樣な理屈をこねる人もあるまい。こゝにある茶碗をありのまゝ（自然）と見立てゝ扱ふことから出發すれば、その自然（ありのまゝ）を破はさないことは、破はしてつぎ合せるより賢なることであるとなる。それほどのはつきりした事で

あるにも拘らず、なぜに破はさないやうにせないのか。なに故に小さなつぎ合せにほこり顏とたかぶつた生活をして、それより以上己れが破わして居ることに氣付かないのか。

破はすといふのは、考へ出すことである。無明のことである。執はれた智惠のことである。思慮分別のことである。

生れて佛の樣な顏をして、周圍の人の心を引つけてゐる嬰兒は、まだ白玉の茶碗の無きずに近い。何とかの名を付けて呼び出しても、陶然として宇宙と一つになつて居る。破はされない。娑婆に意識をあらはさない。娑婆相に疲かれはてた親々が、貧富に拘はらず智無智にかゝはらず、陰陽相信の大自然に安住する時、そこに光りの種が胎まれる。考へるでなく、思慮分別を用ゐない。大博士の子も無學者の子も、同じ玉の樣な顏をして產れてくる。長者の子でも乞食の子でも平等に相を具へて產れてくる。大自然は此間に少しの依估をまじへない。

性の愛たるや、實は愛を越えたものである。人の主觀に弄ぶ愛は隨分とけがれがちである。それにもかゝわらずそれを愛と心得てゐる。多くは愛慾であつて不純なものであり勝である。その樣なものからは純なものが出る筈がない。性の愛は性の理といふてもよいそこには寸分の思慮分別を許さない。誰れがすきだとかきらいだとかいふ、是は執はれた迷ひである。たとへこれに如何なる高尙な道理をつけ、哲學や藝術でねり上げた戀愛でも、貧民窟の無學者の戀ひでも同じ畑のものに過ぎない。趣味があふとか深い了解があるとかいふが何程のことでもない、畢竟念の入つた迷妄である。性の眞

愛は性の眞理ともいへるこれが性の交合ともなるが、通じて是は極めて嚴肅なもので亦無邪なもので大自然のものである。であればこそ子がやどる。光りの種が受胎される。執はれた愛念と性の交合とは世界がちがふ。愛念は人間の執はれた世界で、性の交合は大自然の世界である。何かと六ケ敷考へ込んだ戀愛を神聖なものと思ふて、性交をいやしきものゝ樣に扱ふは、己れの心がけがれてゐるから起る見解である。度を亂し時を亂し處を亂す性交は、不純な愛慾を冐すからである。正しい度と時と處と得た性交で、そこに一點の邪念が交はらずば、そは神聖なことである。神聖な高尙なものらしく扱ふ俗に所謂戀愛觀なるものこそ、これはこるほど危いもの、道理づけれはづける程邪路に落入るものである。はては情悶情死となりなどする。迷情が迷情だけですめばよいが、純な心と純な身體をいためることはけしからぬ。己れの造つたからだでもないに、情死して事がすむと思ふのは大間違である。

迷妄の人の世は迷情と自然の心身とを一つにするくせがある。迷はない純な心と正しい性交は天國にても許される。そこには必らずしも占領心がない。誰れの妻誰れの夫と定むる必要は、此お互ひの生活が何といふても執者の世界であるからである。端的に天國の神韻がひらめいても、衣食住は勿論社會組織全般が倫理道德で統制するを必要とする世の中である故に、一夫一婦でなければならぬが、佛書に所謂、我相、人相、壽者相もなく、すべて大自然に乘托するまゝであり得るならば必らずしも一夫一婦をのみ善しとせないでもよかろう。誰れも一夫一婦でない爲めに鳥の生殖や花の交りを不自然と云ひはしない。性交が不純なものゝ樣に扱はれるのは、性交を中心にしてのその前後の情念や妄執や戀愛觀と混同さすからである。この前後の不純ないやしいものを、總てきりはなした眞純な性交

は神性に近い。神性に近ければこそ神の子が受胎される。自分の子、私のこしらへた子など思ふは潜越至極である。私し心のなくなつたとき自然の内の一種の妙用が起る。不純な戀愛觀の奥に無邪な陰陽相引の自然がある。戀愛觀がなくても性交はあり得る。再たび云ふ純正なる性交は自然であつて、前後の情念及生活相こそ不自然であることを。故にいかに前念の妄情がからみ付いてあつても、性交は反つてそれをふり落して、陰陽混合の境地には恍惚至純のものとなる。（無論それは人の身にあらはれた混合の境で法界と人類との大混合ではないが、それとこれとが又不二でもある。）此端的の以外の不純なものを悉く切放して見るならば、これは全く人間ばなれしたものである。かよふのものであればこそ神の子が宿る。微細にわたれば物心不二の道理で、不純な情念がその生れた子にも染潤する爲めに種の質に差別がからむが、慨して生兒は神性より遠かつておらぬ。受胎より産兒に至るまで、人間の思慮分別や智惠や認識とかいふものはほとんどかゝわらないことは明かである。兒を造るのは神わざである。佛様の様なかほをしてゐるのは當然である。親々が迷ひに迷ふた娑婆のつかれを、無心な嬰兒によつてなぐさめられ、救はれることがおびたゞしいのである。智惠とか思慮分別とかは此自然にくらべては極めて淺墓なものである。にも拘らず、又その智惠で子を育てる。太郎とよび次郎とする。天と敎へ地と習はす。東西南北と思はせ、生老病死と迷わせる。陶然として神性を失はない嬰兒（たとへ大洋のまつたゞ中へ、投げ捨てよふと擬したとて、にた〱笑つて少しの恐怖をも感じないほどの）を、敎育して神通自在を失はすのである。

私はこの敎へかたと破はすとたとへる。白玉の無きず茶碗は生れながらの神性のまゝを云ふのである。

智惠や思慮分別を第一として、自然を征服するなどゝ思ひ、科學にのみ無上の權威を與へての現代

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

文明は此たとへによれば白玉の茶碗を破わしたことにあたる。破われたものには統一がない。最後の理想を實現しようとて、智を練り思慮を深めてゐる。微に入り細に入り、大に及び遠に延びる。毒瓦斯も出來る、ラヂオも出來る。六十四と極めた原素も數がふへたり、アインシユタイン氏の相對性原理の發見ともなる。けれども人類の悶えと不安は段々ふへこそすれへることはない。發明のうちは破片をよせあつめてつぎ合はされることもあるが、さらに細かく破わしてゐて、それに氣付かないこともある。少し落付いて見るとそれがよく分る。智惠がふへて悶えが多くなり、醫術が進むよりは病氣がふへ、生産が發達しても債務が一層ふへてくる、賢こぶつた權利思想は已れの身と地位とを他と共に滅亡させることになつてゐるではないか。破はしてゐると見立てるも無理ではなかろう。

之れを統一して安住せしむる爲めに藝術によらふとする人もある。けれども藝術觀にも色々ある樣だ。卜翁の樣な藝術觀は宗教に近いが、之れと反對のものも藝術觀として扱はれる。堂々たる宗教的の藝術品でも藝術觀でも、何だかまだ統一安住は出來ないらしい。純宗教にゆくと稍落付くものがある。どうやら破片がまとまるらしい。しかし純宗教は全く智惠ばなれする事を要求する。

科學を輕視はせぬ。けれどもそれに第一の權威を與へたくない。智惠や思慮分別をいやしまぬ、(純化させると役立つものであるが故に)、けれども決して囚はれたくない。安住統一の救ひは、それらを超越することによつて開かれる。思無邪とは儒家の云ふ處。非思慮底と禪家はいふ。一文不智の尼入道となれど淨土門は教へる。おさなごの如くになれと基教はさけぶ。破片を全くつぎ合せて全一に歸るには、矢張智惠の世界より超越せねばならぬことになる。始めより破はさぬは一段賢いことである。

かく云ふたとて原始にかいれ、といふのではない。おさなごを大きくせなといふのでもない。いつ

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

ぞや『教育とは何ぜや』と云ふ質問に對して左の樣に答へたことがある。

『教育とは何ぞやに答へることは私の柄でない。けれども只一つの註文がある。それはすべてが假定てあることをよく前提してほしい。天なりと敎へずに假りに天といふとなし、東西南北なりときめつけずに、しばらく東西南北といふやうに。すれば生老病死共に喜悲愁歎に陷らない。この心持にて智識を扱へば障りがない。この氣持にての思慮分別を非思慮底の般若智といふ。かよふな扱ひ方を我等はおひかりによるといふ。智識を第二におくのである。これを破はさぬよりの發展といふ。此場合にはあらゆる階級はみなおひかりの前に懺悔奉仕をすることになるのである。白玉の茶碗の新らしきは少しも破はさないで、古い破片をつぎ合せることになる。かくて始めて世は理想化に進むであろう。

妄智はいつも自然を破はす。そのうちからおひかりは絕へず世界と人類とを守つてゐる。妄念が消へ妄念前生の生活相が自然の道理で純化する時、四時行はれ百物生じ、生れ成長し老熟し示寂して少しも自然を失はぬ。一燈園は破さない生活。宣光社は破れものをつぎ合す生活である。

今の科學を若し權威あるものとするには、心細い感じがする。成程不思議な發明も出來よふ、併し何だか廻り遠いやうに思はれる。往ききつた處は我脚下であるまいか。如何に數を重ねても零に比べて貧弱である。鷄卵を科學的に造り上げても、孵化する生命は造り出せぬ人間が科學の力で生命をもてる人間を造り出したら、それが科學の極度であろうと云ふことを聞いたが、その人は此極度に達するは遠い遠い未來であろうと言ひだした。けれども不思議なことには此生命をもてる人間をば、無學の人でも無造作に產み出してゐるではないか。進步々々と云ふは遠廻りをしてゐることであるまいか。退一步こそ今のあらゆるゆきつまりを整理する近道であると信ずる。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

無相無縛の境涯へ

谷口雅春

M兄。

豚に眞珠を投げ與ふること勿れ、振り返りて爾曹を蹴みやぶらん——と云ふ耶蘇の言葉は悲しい言葉だと思ひます。此の頃わたくしは此の言葉を別の暗さでながめてゐます。

本當に深いそしてひろい立場から云へば、豚にも必有佛性である筈であるから、われ〳〵はその内なる佛性をおがんで——佛性が顯れなかつたら、自分のおがみかたが足りないためだと、どこまでもおがみなほして——行かなければならない筈だとは思つてゐます。けれども、今日はさうした机上の理想論はぬきにして、事實に即して問題を申上げようと思ひます。

家庭のうちに『豚』がゐるときには大抵の人は躓きます。〇〇氏が先の奥様をどうしても自分と同じ道に入ることが出來なかつた深い悲哀を私は又しみ〳〵と味はひます。キリストもカナンに於ける或る人の饗宴に招かれたとき、母マリヤに對して「われ爾と何のかゝはりあらんや」と激語されました。フランシスも父ベルナルドにむかつて「今日からは自分は天の父の子である、ベルナルドの子ではない。」と天を指さして云はれました。釋迦やその他の導師が多く出家しなければならなかつたの

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

は家庭のうちに『豚』がゐたからぢやありますまいか。

家庭のうちの『豚』が厄介なのは、自分に眞珠を投げられた時に、相手に噬みつくだけではなく、ほかの人に眞珠を與へやうとしても、その邪魔をして噬みつくことです。

私は今二つのたのまれた仕事をもつてゐます。その一つは震災に會つたときまだ臨月で胎内にゐた子供を、あらゆるものを犧牲にしてでも優れたるものに育てあげると云ふ仕事です。親たるものは法界から、その子を育てることをたのまれてゐるのだと思ひます。

子供を育てることがどんなに尊いことか——私はこれを自分自身の子の世話をして見て知りました。貴方の世話していらつしやる『子供の家』の仕事がどんなに尊い仕事であるかと云ふことも。——

私は自分が自分自身の子供を世話するまでに子供を二人あづかつてゐたことがありますが、今から考へて見ると、唯漫然とその二人の子供を養つてゐたことが耻かしくて冷汗がながれます。

育兒とか兒童敎育とか云ふことについて眞面目に研究したことのない人が子を育てゝゐるのは恐ろしいことだとつくづく思ひます。子供がにこやかに笑ふからと云つて、眞に愛のない人が子供を玩弄物や遊戯の道具のやうにしてからかふのは罪惡です。又眞に愛があるにしても叡智を伴はない溺愛は寧ろ遠離さるべき煩惱だと思ひます。

西村伊作氏が、今あるごとき善き兒童に氏の子供を育てるために、氏の親達とどんなに爭つて來られたかと云ふことを氏の著「我が子の敎育」で讀んで尊い氣がしましたが、わたしは今それと同じ立場にゐて苦しんでゐます。

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

西村氏が嘗てなめられたやうな同じ立場にゐる時、自分の子を善きものとするためには私もやはり周圍と戰はねばなりません。否、戰ひつゝあります。そしてその周圍と云ふのが私のために〇〇と〇〇なのですから、それが實父母の場合よりも一層始末がわるいのです。

私は自分の子の養育を法界からたのまれた仕事として之れに奉仕すべきであると感じます。そして私の家族のうちで、私が育兒や兒童のことについて最もよく研究してゐると云ふ點に於て、そして最も兒童愛の深い點において、私がその世話を監督し得るのに、自分がしないで私以外のものゝ下手な敎養法にゆだねることは子供を發達し得る可能以下に引きおとすものでありますから、子供に對する罪惡だと考へざるを得ません。わたしはこれを自分の我執だとばかりは考へられません。

嬰兒が泣く度毎に、彼女を抱いてゆすぶつたり、乳を哺ませたりすることは育兒上甚だよろしくないことだとは育兒學者の筆をそろへて書いてゐるところです。しかも私の〇〇〇はさうなすべく私を強ひようとするのです。私は從ふことは出來ません。私は始めは育兒に關する書物を〇〇〇に讀んできかしたりなどしてゐましたが、しまひには〇〇は育兒の理論などには無頓着で『泣かせると五月蠅くてたまらない』と公言して、唯自分の五月蠅さゝを避けるためには子供の敎養には善からうが惡からうがかまはないと云ふやうな態度をとるやうになられました。泣く子の五月蠅さを、その子の前途のより善くなるためを思つて喜んで忍ぶのには、愛とそして智慧とがいるのです。

かう云ふ場合に、私は下座について、『わたしが惡いのです。どうぞ私の子供を貴方のなさりたいやうにして下さい』とは云ふことは出來ません。布施太子なら云ひ得たかも知れませんが私はさう云ふこ

とが出來ません。子供が唯の物品なら、さう云つて抛げ出すことが出來たかも知れませんが、子供は一個の人格の芽生えですから惡く培はれると知りつゝ放置することは出來ません。

此の場合に一燈園的態度としては、どうすべきかは知りませんが、私としては○○を避け子供を抱いて十字街頭に立つべきであるかとも思ふこともありましたが、私は、十字街頭が子供の教育にとつて最も適切なところだと決定することも出來ません。十字街頭で必ず子供の成長に必要な精神及び肉體の營養が得られると云ふ自信はありません。

併し謂はゞ私は十字街頭に立つてゐるのです。私は先に法界からたのまれてゐる仕事があると申しましたが、その一つは今申上げた自分の子の教育です。もう一つは『靈魂不滅』の一大事實の宣傳です。中桐さんもその設置の主唱者の一人でゐられる『心靈科學研究會』は本郷の元町にありましたが、靈火災のために燒失して、機關誌「心靈研究」の發行も中絶してゐましたが、今年(大正十三年)の紀元節から『心靈界』と改題して復活しました。私はその『心靈界』の編輯をたのまれてゐるのです。天香さんの『轉禍爲福の三重大願』の第一願は『個人としては生死を超えること』でありましたが、生死を超えるにはどうしても「靈魂不滅」の一大事實に直面しなければなりません。靈魂が不滅であつてこそはじめて此の世の不幸に覺悟が出來て來るのです。合理的な來世が存在しないで、惡人が却つて幸福にくらして行く如く見える現世だけが唯一の存在であるならば、内的なよろこびのほかに何ものも求めないやうな聖者のほかは、出來得るだけ此の世の快樂を貪れば好いと云ふことになり

ます。天香さんなどになられると來世への生死をさへ超えると云ふことを目的としてゐられるやうで、此れが無論理想的には一層高い境地ですが、世間に多き下根の人達にはさう一足飛びにまゐるわけではありません。それゆゑ普通一般の人にとつて、生死を超えたる大覺悟を得る第一歩は、靈魂は肉體の死を超えて尙存續すると云ふ一大事實を知ることにあると思ひます。

兎も角わたしは東西の心靈現象の事實をあつめて「靈魂不滅」の一大事實を實證すると云ふ仕事に奉仕するやうにたのまれてゐるのです。それは人からもたのまれてゐるのですが、多分法界からもたのまれてゐるのだと思ひます。何故なら今のところ、それに適當な人がほかにないやうですから。賴んで下さる人も、賴まれた私もあの震災で燒け出された無一物者です。此の仕事に賛助して力を添へて下さる人も少々はありますが、これも皆貧乏な人ばかりです。無論私は給料と云つて貰つてはゐません。住む場所も與へられません。それで養父母の家にゐながら、その貧しき賛助者から少しづゝ捧げられるもので私たち親子三人は生活してゐます。私は今養父母の宅にゐますが、私はむしろ無一物の權威――今のやうに供養に生きる生活がどんなに却つて自由なものであるかを――養父母に知つて頂きたいと今迄思つてゐましたが、「お前がさうした無一物の生活をしてゐるから、親が却つて我利〳〵妄者にならなければならぬ。お前が生きてゐる間はお前のさうして供養に生きる生活で子供も一緒に生活して行けるが、お前が死んだらどうするか。お前の子は餓ゑなければならんぢやらう。その時のことも考へておいて俺れが今から我利〳〵妄者になつて蓄へておかねばならん。」と養父は云ひます。私が奉仕的な生活を送るからこそ、それが却つて養父母を我利〳〵妄者に陷れるたねとなると云ふのです。私は今清貧の無力狀態をひし〳〵と感じます。

私はこの手紙のはじめに書いた『豚に眞珠』と云ふ言葉を思ひ出して頂き度く思ひます。清貧の生

活に共鳴する人もありますが、どうしてもその價値をみとめ得ない人もあります。人には色いろの素質があることを淋しく思ひます。私は「清貧の生活」しか持ち合せがないのを不自由に感じます。金錢を欲する人に「清貧の生活」を投げ與へても振り返りて噛みやぶりに來るばかりです。私自身は清貧でも好い。しかしその教養のためにもつと好い環境が必要である幼な兒によき環境を與へる力のないことは私の力なさです。私が經濟的の安心を與へることが出來ず却つて將來の不安のために兩親の我欲をつのらすのは私の力なさです。これをお光まかせと謂ふのは自分の無力をお光に轉嫁するものだと思ひます。よき環境の必要なものゝためにはよき環境を與へ、經濟的保障を要求するものゝためには經濟的保障を與へ、豚には人糞を與へ、貴婦人には眞珠を與へ、自在無礙に觀世音菩薩の如く三十三相に姿を變じ得ないのは私の名譽ではありません。私は現在「清貧」の一相しか持ち合はしてゐません。これは自分の無礙自在さの缺乏てす。天香さんが私に「自分がこの生活をはじめて最初に家庭を破壞して了つたのは宣光社のはたらきが缺乏してゐたからです」と云はれたことがありますが、わたしは其の深い意味を近頃しみ〴〵味ひます。貴婦人に眞珠を、皇帝に王冠を、守錢奴に金錢を、豚に人糞を與へ得て、自分は持つでもなく、持たぬでもない無礙自在のはたらきこそ大乘の聖者の仕事だと思ひます。かたくなに清貧一點張りでこれでなくてはならぬと行者のやうに氣張つてゐながら、誰にも欲しいもの、必要なものを與へ得ない如きは、私の理想とする「無相なるが故に自在」なる境涯とは違ひます。此の頃やつとそれに氣がつきました。私の現在の生活は「無相」ではなくて「清貧」の一相に凝滯したものです。私は此の凝滯をやぶらなければ一層大なる生活の向上は得られないことをつく〴〵感じます。

各地に光の友會が出來つゝあることを、私も光の友の一人としてお悦び申し上げます。私も光の友

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

の一人として御願ひ申し上げたいことは、光の友の光化運動が、われ〳〵「心靈界」同人の靈魂不滅の宣傳と手を携へていただきたいことです。現世の不合理らしく見える事實を合理的に償つて呉れるやうな來世が存在しないならば此の世界は調和あるコスモスではありません。かゝる世界に於ては善をなす勇氣は出ません。來世の幸福を目的として善をなすのでないにしても、かゝる不完全な世界自身は善をなすことを價値づける根據を失ふことになつて了ひます。それ故合理的なる來世の存在は倉田氏も云はるゝ通り實踐理性の要請です。しかし私の考へでは、來世の存在はそれが實踐理性の要請であると云ふ以外には證據はない、それを得ることは我々の能力の限界を超えてゐる——と倉田氏のやうには考へられません。現に吾々は多くの證據をもつてゐます。又多くの證據が吾々の手許にあつまりつゝあります。それをとりついで發表し、合理的なる來世の存在と我々の個性ある靈魂の不滅とを世人に確證することは、不合理なる如く見ゆる世界に善をなすことの根據を與へるものだと考へずにはゐられません。此の仕事は天香さんの「轉禍爲福の三重願」の第一「生死を超えること」に合まれてゐる仕事です。それ故私はあの三重願を實にうつす上から云つても此の仕事に光の友の應援をねがひたく思ひます。心靈科學研究會の同人はいづれもひとしく清貧の生活を送つてゐる人達ばかりで殊に震災に燒け出された人が多くて資力を有しません。機關誌「心靈界」の讀者も同誌復活後の數は尙はつきりしませぬが(震災當時讀者名簿を燒失しました。)千五百に滿たないだらうと思ひます。それでは機關誌の維持だけでも頗る困るのです。私は心ある「光」の友の同情に愬へて、われ〳〵同人の仕事が良き仕事ならば機關誌「心靈界」の基礎を鞏固にするために、尙二三千の讀者を紹介して貰ひたく思ひます。

(以下省略)

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

友よ！一所に祈つて下さい

八田勝三

斯う呼びかけずには居られない程、此頃は一人強く、心の堂奥からこんな囁やきが聞えて來る。そしてそんな時には何時とはなしに涙ぐむでゐる。

　私は電車の中などで、本當に他人みたいな顔をして、隣り合ふて坐つてゐる人をみると、云ひ知れぬ寂しさに襲はれる。此の世に於て私達は遇ふ事が出來た。それすら偶然でないやうに思ふ。而かも人生の途上に於て、同じ道を歩んでゐるといふ一事！　それは何といふ不思議な縁の深い事だらう。その少さなサークル丈けでもが、心から赦し合ふて本當に仲好く生きて行けなければ、私達は何處に愛に惠まれた世界を求めることが出來やう。そこに見出せないで、何處に魂の安住地があらう。

私は皆様に心から御願ひする。

『私達は皆不完全な弱い者計りぢやありませんか。お互に審き合はないで、誰もを赦し得るやうに、もう少し大きくなりませう。自分の寂しさを胡魔化すために、他人の事にこだはらないやうに氣をつけませう。』

×

『盗賊にも三分の道理がある。頭ごなしに否定して了ふ時は、折角延びる素質のある者でも、枯らせて了ふかも知れない。一切のものゝ成長を願ふ者は、たとへ相手の說を其儘肯ひかねても、一應はそうした考え方も出來るだらうと受け入れた後、徐ろに自分の心持を披攊する雅量を養ふべきである。』

此月の同人會の席上で、天香様が仰言つた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

相手を論破する事によつて、一種の快感を覺える性格の持主には、味ふべき言葉であると同時に、處生上心得べき事柄だと思つた。

×

『雪駄をはいて歩いて居た時に、泥濘に出喰はして、始めは引き返そうかと思つたが、思ひ切つて行つたら、如何やら斯らやら通つてゆく道があつた。人生もこんなものでせうか！』とはSさんの斷言。じてゆく處には、きつと道がひらける。考え込んで居たら日が暮れて了ふ。

×

園の生活には個身脱落と共に法界成就の願がある。過去を振り返るに、私達は兎角個身脱落に囚はれて、法界成就を同時に考えて居ない傾きがなかつたか？自己の進退が一切に連繫あるを、はつきりと知れば尙反省すべき餘地のあるものを、自分の心持に合はない事などを理由にしすぎて、少さな自分の殼の中に閉ぢ籠つて了ひはしなかつたか？

一の力が五寄つた時に、五の力にしかならないとは私は思はない。集中された力はより以上の力を生ずる。集中的祈りによらずして、何時よりよき世界が將來されやう。全體を完成するために、十字架は最初より覺悟すべきもの、堪へられるだけの重荷は持たせて貰つて、精一杯精進致しませう。

×

私は幾度も考え直した。私のやうなものがこんな願をもつことは傲慢ぢやないかと。一體四年の月日の間に、何をして來たのだ。一つとして、これはと取りたてて思ひ出せる事もないぢやないかと。

實際振り返れば何もない。然し唯一つ嚴然たる一事實だけはある。

『內容はなつてゐないにしても、兎も角生かされて來たこと。』

これだけは萬人の前へ行つて、公言しないまでも否定されないもの。此の牙城を死守する時、それが如何に少さい力でも、全世界の時代苦を

刺戟せずにはおかない。此の角度から人生を凝視める時、全人類との交渉を深める。たとへ足取りは如何に弱くとも、皆様の御祈添えによつて、一歩でも近く光の世界へ歩ませて貰ひませう。

―大正一四・六・八―

×

その時直感した事と、後から悠り味ふてみる感じとの間には、可成の距離がある。その點から考へると、旅を終えた今、書かうとする此の所感は、その時の實感からは大分離れた、危かしい過去の記憶を土臺に、此頃の私の思想を盛つたものにすぎないと思ふ。

×

各地の光の友會が、殆んど談話會のやうになつてる際、福岡は過去一年間集まりの當日だけでも、園生活を體驗したいとて托鉢を實行して下つたのは喜ばしい。同時に福岡、宇美、八幡、長府などの方々が、親類同樣の交りをして居て下さる事實は、私達が希望する理想の社會を暗示する。恐らく全國に散在する光の友會の間に聯絡が出來、統一される曙光は、彼地より輝き出づるのぢやないかと思はれる。

×

『何卒好加減で結構で御座います。そんなにして頂きますと、すみません』と。

私達は時々こんな挨拶を受ける。さう仰言る心持も分らないではないが、過去に於て、どの位人類が好加減でよいとして了ふ考へ方に毒されたか！　好加減で好いやうな人生なら生きない方がよい。人類が未だこんな社會狀態でまごまごしてゐるのは、皆がまだ本氣になつて生きてゐないからだ。眞實を求める勇氣に乏しいからだ。生命によつて綴られる生の頁には、手習ひは一つもない。全部が淸書である。一劃を忽かせにしても同體の調和は破られる。

×

歩むまでには幾多の道が私達の前に横つて居る。然かも歩んで了へば唯一つしかない。

斯く歩まざりせばと反省させられることは、愚かな私達に絕えずあることだが、歩み終つた

足跡を氣にしすぎて、現在に愛想をつかせてはならない。現實の自分は一切の批判を起えて、その人自身にとつては全部である。それを輕んじて、何處に理想の自分が存在する。その時々に持つ己が德を、素直に受け入れて、少さいものは少さいものなりに、不完全なものは不完全なりに、靜かに自已を見守つて生きてゆくのが、人間に許された限界じやないだらうか？

×

自分だけがたとへ血の出るやうな、精進を續けやうと、敢えてそれは差支えのないことだ。然し自分の精進の程度を以て他人を律してはならない。例へば甲は七の階段を悠々と歩んでゐるからとて、乙が五の階段に達せんとして、渾身の努力を續けてゐるのを尙足らずとするのは無理である。その人々が、今歩んでゐる階段に於て、力一杯に歩めるやうに、出來るだけ御添えすることだけが、お互の責務だ。

×

何時か園で薪が無くなつた時に、雨戸を外して燃して了つた。酒を暖むるに紅葉を焚く風流人はあつても、雨戸を燃して了ふことは、園の生活者でないと出來ない事柄だ。持たざる强みは、持たんがための不安に日夜惱まされてゐる人達には到底像想出來ない境地である。甲冑で身を固めてゐるものには、裸身の氣輕さは分らない。

×

三月振りに歸園すれば、花は散つてゐても、東山の若葉の美くしさ！、禪堂の窓からぢつと眺めてゐると、はぢきれそうな生命力の横溢を感ずる。粉飾された人工美などには、到底味へない、直ちに核心に迫るものがある。私達の一擧手一投足にも、此の美・此の力があつて欲しいものだ。

×

『私には病氣をしてゐる暇がない。』

何時か天香樣が斯う云はれた。簡單だが、何といふ力のある言葉だらう。

—大正一四・五・一三—

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

讚光錄

中田美穗

陽の下に山河かがやき身はまことうつつに生きてありがたきかも

入りつ日の紅(あけ)に染(し)みぬれ身は今日も一日生きて事なかりける

公園の松に日暮れて風さむし入りくみて櫻花(はな)の白くありけり

芽ぶく樹の木木おの〳〵の色に出でゝ山うつくしくなりにけるかも

芽ぶく木の山の麓(ふもと)の梨畑花さきさかり春ゆかんとす

春雨や地平を遠く桑原の青き芽ぶきの色に煙(けぶ)ろも

忍び寄る地靄に月の光(かげ)けぶり麥穗の刺(とげ)は露をふくめり

月に啼く杜鵑(とけん)かなしも青麥に風そよそよと穗の光るなり

●人にそむかれて其の誓ひ事もむなしくなりけるに

あてやかに一人の君を守り來しその愚かさをよしと思ふも

惠まれて在りと信ぜば身もいとしそむきし人も許すべきかな

●去歳四月、緣有りて中桐確太郎先生と長野市に於て二日間の居を共になし得しを思ひ出でゝ懷舊の情に堪えず詠める

雪の山近く佛都の花ぐもり杏の花鐘ひびきつつ

鳴る鐘の昨日(きのふ)の如し一年の日は早や過ぎて懷しきかな

●清水精一師に捧ぐ

出前持それとあられどおごる世に清きこころを送り來し君

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

蔭に泣く人

すずき五ろう

赤い提灯
紫の幕
お稚兒の笠に
花が散る
開宗紀念大法會

松之間待遇
鶴之間待遇
鷺之間待遇
各信徒御入口、
御賽錢の少いは
犬ころと一緒に
お詣りせ

山門の蔭で
さめざめ　泣いている
御人は　誰ぞ
痛はしや

壬生狂言

逝く春や
壬生狂言に
花が散る、
鐘と木魚に
木蓮の
紅い花辨が
崩れ散る

觀る人も
偕に踊るや
壬生の春、
浮世は
亂行大念佛
泣いて　笑ふて
暮もなや

——壬生寺の融通大念佛は
佛前の勤行を正行念佛
狂言を亂行念佛と云ふ由——

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

お光の導きを受けて

香園寺内一道士　谷　口　光

四月二十一日一燈園の皆樣と小松驛で御別れした私達は、何やら取殘された樣な物足らぬ一種の淋しさを感じてならなかつた。

一日二日と日を經るにつれて、一人や二人づゝ何處から何處ともなしに集まられた十一人の方々が來るなり臺所に本堂に事務室に境内に水の樣に流れ入つて御托鉢下さつたあの御姿！何の障りも隙もない、賴まれるまゝに托鉢せられながら而も隨所に何かの主となつて總てを動かして居る樣な大きな力のはたらき維摩尊者の再來の如き天香先生のまなざし、三日間に渉る御講演の內容の事實等が入り代り立かわつて幻影の樣に浮んで來てどうすることも出來ぬ樣になつた。

先生の御講演に「話しは私がするのでない皆樣がさすのである、私と皆樣の總和が一つの響きとなつて表はれるものだから冴の響きの如く何にも殘らない樣に聞いて下さい」と言つて貰つたまゝを信じながら、ぢく〳〵と胸中に泌み入つて來る或者、托鉢の時、遊隨の時默念の時絕へず表はれて來る此の幻影——あれから私の敎園を恐ろしい力で導いて吳れて居る活きた此力——此光明——を禮拜せずに居られない。

今迄讀んだり聞いたりした聖者達の境地や糞掃衣を纏はれて澤山の羅漢達と托鉢せられて居た釋尊の偉大な面影を現實に拜まして貰つた感じがする。無我の中から眞實に現はれて來る金剛不壞の大菩提の輝きや、苦樂を超越した大安樂の境地や、淸淨潔白の妙法や、眞我を得て自由自在なる大活動の有樣など、密敎によつて敎

へられた其事實を天香先生の體驗其のものゝお話しによつて可なりはつきりした樣な感じがする。

宗敎は宗敎家の宗敎でなく實生活其まゝが宗敎でなければならぬと知り乍ら實際に臨んで矛盾だらけであつたことも恰も富豪の息子が澤山の財寶を讓り受けながら、其價値を辨へず、其有難さを知らす濫費してたゞを捏ねて居たやうなものであつた。與へられた利刀は却て自分を疵け他人を害して居つたことが多かつた。

世の中にもこんな現はれが幾らもある樣である。折角の文明や折角の智識や折角の地位財產名譽等が增せば增す程世の中を變な方へ導いて居るのも此根底を得ぬからであろう。

お光のもとに現はれない總でのものは砂上の樓閣と何等選ぶ處がない。

現世も過去世も末來世も場所の如何を問はずお光のある所直ちに平和と歡喜が勇躍する。

其の基礎工事が最も大事である、其お光は自我を捨てゝ托鉢することによつて惠まれることを信じさせて貰つた私達はこれに進めばよいのである、進ませて頂かう。

不斷の懸命を以て一つ一つ無量の法益を積まれた天香先生無盡の寶——たゞ拜ませて貰ひまう。

●本號表紙題字　劉宋爨龍顔碑より頂く。

東濃講演行脚

若林正

斯うして筆を取つてゐる間も其の當時を思索して天香さんにすまなかつたと御詫びしてゐます。

中央線中津川驛から北惠那鐵道に乘換へて一時間十分で付知町へ達します。北惠那鐵道の電車は新しくて乘心地もよく夫れに沿線の風光も詩的で線路は木曾川の上流を流れに沿うて走つてゐる。質朴な田舍の人達は太い煙管を遠慮なく電車の腰掛で叩きながら大きな聲で話し合ひ運轉手さんは空箱に腰掛けて暢氣さうに把手を取つて運轉してゐる有樣は一寸他では見られない平和さです。

付知町は明治維新の破佛事件の際、寺院佛像等の大多數を破壞燒棄せられ至つて宗教心の乏しい、そして御料林の木材の運搬等で生活してゐる半農半商の町で四五年前までの好況時代には大小四十程の製糸、機織工場が有つたが其の後財界不振の影響で製絲一ヶ所を殘して皆閉鎖して終つて財政にも行きづまつてゐる處です。

天香さんは貳月七日午後七時二十分付知町の田口鷲郎さんの宅へお着きになつてくつろぐ間もなく二三日前に亡くなつた田口さんの奥樣の靈前で同人の方だちと心からの讀經をして下さいました。其の後で幼なくして母を失つた愛らしいお孃さんが二人少さな手を合掌してゐられる其のいじらしい姿に私は泣かされました。

食事がすむとすぐ八時から開かれた付知劇場での講演會には聽衆的九百先生の溫和な顏に笑を含み底力のある聲でせられる。二時間半の長い講演に聽衆は緊張し切つてゐました。講演が

すみ青年會の幹部が閉會宣しても容易に立つ人はゐませんでした。

拾壹時から青年團長早川了介さんの宅で坐談會をいたしました。集つて下さつた方の中に中年以上の婦人が多かつたのはうれしく感じました。

八日は午前八時から長さ三里以上と云ふ日本一細長い町にそうて流れてゐる付知川が昨年の大洪水の時、路も橋も流されたまゝになつてゐるのを青年團員五十幾名と園の同人の方だちの托鉢で立派な路ができました。托鉢が終つてから額に汗をにぢませながらきれいに石を取り除けられた河原の路を見つめて「うれしそうな」顔をしてゐられました。

午前十一時から付知北部の宗敦寺、午後二時から田瀬小學校で各二時間の講演が有つたが、何れも多數の參會者が有り、殊に田瀬では若い婦人が山路を一里以上も歩いて下さつた方が五六十名も有つたには合掌せずにはゐられませんでした。

田瀬の講演がすんで先生のお歸りになつた頃は冷たい北風が身も心も凍いる様に吹き荒んでゐました。

いつの講演にも無理をお願してほんとうにすみません。今度も七日の晩は二時に就床翌朝は六時起床と云ふ工合に講演の疲勞、睡眠不足、寒氣と戰ひながらも終りまで町民の爲め講演に、坐談に、應接に、一分の無駄もなく托鉢して下さつた事を感謝します。　（一四・二・一〇）

●東京一燈園より　毎週水曜夜七時から本所區林町二ノ七八「働く者の家」で同人會があります。同人光友諸兄姉の御光來を願います。

天香師御來岡の事ども

照朗記

昨年からの念願が、漸くとゞいて、天香師は九州路の托鉢行脚を了へ、歸路の途を去る三月二十二日勝淳樣と御同伴、御來岡下され、午後一時半より東中山下の岡山キリスト教會で二時間半以上もお話し下さいました。會するもの約二百名を算し、皆樣熱心でなか〳〵盛會でありました。會散の後、天香師は直ちに禁酒會館に入られ數名の來訪者を相手にお話しになり、勝淳樣は婦人の方と後樂園を散策なされ、歸りをお招により、十年間禁酒禁煙を斷行された記念の建築たる、小橋町の玉井伊三郎氏の住宅を御覽になり、しきりに讃辭を洩らされておいでゝありました。

午後七時より、城下の禁酒會館で、再びお疲れのお身體を壇上に現はされ、又も二時間餘りお話しになりました。會場が餘りに狹かつた爲めでもありましたが、滿員で迚も全員が收容し切れなかつたことは誠に遺感の極みでありました。講演後、心ばかりの茶話會を開いて各自の質問を聞いて頂くことにいたしました。就中、中國勞働組合員の方々によつて非常な賑さを見ました。「勞働の藝術化」てふ一語を導火線として可成な熱論がありました。十二時前から禁酒會館從業員の爲めに有益なお話の數々がありまして、御就床の頃は既に時計は一時半を示して居りました。

この月、嘗て在園なすつた、津山の田中周周、兒島の赤木武郎兩兄並びに、上道郡の齋藤山枝、赤磐郡の戸田深雪、市内の岡こずゑ子諸姉などお加りになり、いろ〳〵お働き下さいました。

翌朝、雨を冒して天香師も亦玉井氏の禁酒禁煙の家を御覽になり、午前八時十六分の上り列車で三の宮まで行かれました。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

鹿ケ谷より

みかみ

●五月十一日。吉井機子さんが突然園にお見えになる。きけば、こんど一度歸國して、路頭におたちになるとか。どんなお心持がします、と聞けば、淋しいよふな、大丈夫だと云ふよふな、心細いよふな、大きな所へ行くよふな氣もするが、危つかしい氣もするとか云つてゐられた。夜はそのおわかれにもとさゝやかな茶話會をさして貰つたが、肝心の吉井さんは見えない。もう雲水にしてはあまり雲隂れが早いと思つてゐたら、會の終り頃、やつと顏を出して下さる。誰れの爲めの會だかと云ふよふな顏をして。

●五月十五日。先き頃天香さんが行かれ、同人の方々も澤山よせて貰つた、伊豫の香園寺の同人の方西岡觀山さんがご遍路姿でお見えになる。暫く園で托鉢をして下さる事になつた。香園寺の方は以前から、度々見えたが、何となく香園寺の方より糸を引かれるものがあつて、なつかしい。

●五月十六日。死なれた森田鎮雄さんの法養を園でさして頂く。立山不退さんの導師でおつとめをする。その後もなかを頂き乍ら死んだ人の生前の話を續ける。森田さんは死ぬ前に、人が側に行くと、手を握りたがつて、瘦こけた手で握ぎらせて呉れとだゞつくこのよふにすねてゐられた。その癖握ると、自分の血の氣のない手には他の人の手は火のように熱く感じると見えて、もう好いと、その手をはなして振つた。咽喉をおかされて居つたこの人又よく人が行くと水を飲めとよくすゝめた。それもコップで飲んでくれとすゝめてゐ

た。自分が飲めないから、せめて人の飲むのを見てゐると、珍しくもうれしくも思はれると咽喉をいためたかすれ聲で云つてはかすかに笑顔をする。いくらかいら〳〵してゐられたが、それでも靜かに逝かれた。この方は死ぬきわまで慘めな人であつた。

●五月二十三日。正午頃、輕くはあつたが長い地震があつた。わりに長いので、當番子はそうと、同人の名簿、托鉢先のインデックス等をまとめて手近かに引き寄せた程一寸長かつた。夜草津に行つてゐられた天香さんから使として、草場さんが見えて、豐岡、城崎地方へ誰か托鉢に見舞つてはとのお言付であつた。

●五月二十四日。塾の方に、保太郎さん立山さん八田さん木魚さん當番子等集つて相談した結果、とにかく、保太郎さん八田さん木魚さんの三人に一時行つて頂く事にする。豐岡地方の慘狀がもう新聞にかゝれてゐて、とりとりの話がはずむ。

●五月二十五日。天香さん草津より歸京。震災地へ行かれた三人も歸つてゐられた。向ふの町長さん方にお會ひして、再來を約して歸つて下さつたとのことであつた。

●六月二日。今晩は又格別よい月夜。月を見ながら月に關する和歌のはなしをしてゐる同人が向ふに四五人。月と團子の說明をして、月はよいが今日は團子がないから一對でない、と云つて笑つてゐる一群もある。四五人裏山にも登られた。婦人室では二階のおばしまにもたれて、二三人の女の方がぼんやり、大きな柿の木の間から月の光に靑ひ空を眺めてゐられる。月がよいから眠るのが惜しい、おやすみの柏子木を叩くのを少しおそくしませう

と典座さんの發議。少しおやすみをおそくして少し餘計に月を見る。

●六月三日。永い間はりつぱなしにしてあつた離れの室を片付ける。森田さんの眠つてゐられた所が、かびがはえて疊が腐つてゐる。死んだ人の姿を思はせる。

●六月四日。園托の方と共に園內の蒲團乾しをする。新しい、古い、大きい小さい、ずらつと張られた繩に蒲團をかける。どこもこゝも蒲團だらけ、こゝも浮世かと誰かに云はれて大笑ひ。一ヶ月に一度は出來る丈け乾したいものである。

●六月六日。土曜會は歸園する人も多くて賑かである。一燈園と組織の關係に付いて、はなしがはずむ、狹くとも深く行きたいと云ふ人、少しは廣くも行きたいと願ふ人、もあつて道のかたきを語り合ふ。廣く深く行きたいもの。

天香師往來

七月

一日——八日　京都在園

九日　岡山光友會、岡山市城下禁酒會館

十日　廣島縣忠海町忠海高等女學校

十一日——十五日　廣島縣尾の道、豊田金兵衛様、世羅郡甲山並光寺、御調郡、比婆郡

十六日——十九日　廣島市及己斐町、二十日市地方

二十日　午前東上　二三日滯在　東京市麴町區永田町二奥田友三郎様方

二十五日頃より三十一日まで　京都在園

八月

一日——八日　和歌山縣串本町、田並、勝浦、新宮太地町地方

九日　田邊上新町原爲吉様方

十二日頃　歸園

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

東京に於ける 自由勞働者問題

松下吉衛

一　勞働者街の瞥見

諸君が一ト朝「猿江」行の割引電車をとつて深川の森下町から富川町の方に向ふなら伊豫橋邊から一二町の間、街路の兩側に三々五々、人待顏に立つてゐる人足風の人々の夥しい群を見出だすであらう。彼等はこの黎明から街頭に立ち何を爲さんとしてゐるのか？　いぶかる者は富川町で電車をすてたまへ。佇むこといくばくならずして次の如き光景に接するであらう。

親方の手代らしい男がどこからかやつて來ると、人足風の人々は我れ先きに彼れをとりまいて、喧嘩でも初つたのかと思はれるまで押しあひへしあひ怒鳴りあふが、やがて五人なり七人なりその中から選ばれて件の男に連れられて行く。

かうしたことがそつちこちで繰り返されて大凡七時頃までは續かう。

これは、説明するまでもなく、勞働者の賣買される光景であつて日傭勞働を取扱ふ職業紹介所が市内外に十七ヶ所もあるのに、かうした勞働市場が此處を初めまだ〳〵何ヶ所もある。勞働市場で買はれて行く人々は、モツコかつぎ、土掘り、片附、車力等の餘り熟練を要しない雑多な屋外勞働に十時間内外從事して一圓四五十錢から二圓位までの賃銀を貰ふのである。彼等の多くは、木賃宿簡易宿泊所の止宿人であるが、宿につく前に大抵はその邊のめしやか居酒屋で電氣ブランとか燒酎とか强烈なアルコールをひつ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

かける習はしになつてゐる。

寒中でも夜この邊を通ると、そつちのドブ板の上に一人、こつちの砂利の上に一人といふ風に泥醉者の横つた骸を見受けるが、これは宿料までも飲んでしまつて、一夜の夢を路頭に結ぶべく餘儀なくされた人達なのである。

一日十時間の劇勞を了へて歸つても、やさしい言葉一つかけられるあてもない彼等にとつては酒こそは唯一つの許された天國への通行劵であるのであらう。彼等は實によく飲む、空腹時でも飯よりは酒を選ぶ。だからめしやで酒を賣らぬはなく、居酒屋がまたよく發達してしてゐる。彼等が異口同音に訴へるところを聽かう。

『この邊の安酒が何でうまいことがあらう。たゞ醉へばいゝのだ、醉つて何でも忘れてしまへばいゝのだ。おれたちは醉はずには生きて居られない。』

何といふ悲痛な言葉であらう。かうして彼等は飲んで暮らす。飲むために生きるのか、生きるために飲むのか。恐らく彼等自身が知るまい。明日のない生活、愛の對象のない生活、かうした境涯に置かれる彼等として、亂しないのは寧ろ不思議。さもないことに物言ひとなり、流血となり、賭博となり、無錢遊興となり、ゆすりとなり、窃盜となる者があるのも誠に無理からぬふしがあらうと思ふ。誰が呼び初めたのか彼等を自由勞働者と名づけてゐるが、そこに何の『自由なる勞働』があるか？

二　自由勞働者になつた原因

東京市社會局は大正十一年三月調査としてこの問題に關し次のやうな報告を發表して居る。

		百分比
1	失敗墮落	三一・八
2	失意又は生活不安	二三・七
3	苦學	八・〇
4	獨立自活	五・八
5	誘惑	四・八
6	初よりの自由勞働者	四・一
7	元の職業が嫌になりしため	三・九
8	進んでなりしもの	三・一

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

9 家庭の事情 二・九
10 家庭不和のため家出 二・二
11 貯蓄 二・〇
12 都會にて成功せんとして 一・五
13 自暴自棄 〇・三
14 不明 一〇・四
計 一〇〇・〇

これは如何なる方法によつて如何なる範圍について行つたものであるか不明であるが、私共の從事してゐる簡易宿泊所での調査の結果とほゞ合致してをり、即ち、自由勞働者の過半は生活戰の落伍者であるか確乎たる計畫なしに一時の腰掛として之れに係つてゐるものと見做すことが出來やう。

それから此の頃のやうな不況時代には熟練工工場勞働者が失業して自由勞働者の群に割込む**者が可なりにあり、又農業の經濟的行詰りと農**村生活の無味とから地方青年（次男以下の者）の上京してこの仲間入りする者が激增したことも見逃す可からざる現象である。

三 自由勞働者の宿所と人員

自由勞働者の宿所もしくは居住地は、木賃宿、簡易宿泊所、人夫部屋、借り間及び長屋であるが、大震災後戸口調査の依るべきものがないので、こゝには僅に大正十四年一月二十三日東京府社會課が管內の木賃宿と簡易宿泊所とについて行つた調査だけによることゝする。

		戸數		人員
木賃宿	市部	三三一戸	止宿自由勞働者	四、〇七三人
	郡部	三七戸	同	三八八人
	計	三六八戸		四、四六一人
簡易宿泊所	市部	二九戸	止宿自由勞働者	二、四三三人
	郡部	一一戸	同	二五一人
	計	四四戸		二、六八四人
	合計	四〇八戸		七、一四五人

この數字から推定するなら、人夫部屋に住込んで親方の世話になつてゐる者、個人の家に**間借りしてゐる者、長屋住居の者（これは家族**ある者が多い）等を合算して**東京市內外の自由**勞働者の概數は約三萬人にのぼるであらうか。

次に少しく木賃宿簡易宿泊所とについて述べ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

よう。

木賃宿

先づその所在地、戸數、止宿自由勞働者數(大正十四年一月二十三日現在)を示すなら、

所在地	戸數	止宿自由勞働者數
麻布區新廣尾町	一三	二一四
四谷區永住町	二六	三〇四
同　旭町	二三	三五一
本郷區駒込富士前町	二	四〇
淺草區淺草町	六四	四一六
本所區花町	六九	八五二
同　業平町	五一	五一八
深川區富川町	八一	一、三七一
深川區東大工町	二	七
荏原郡品川町	一三	一二一
同　世田ヶ谷町大崎町	二	八
北豐島郡板橋町	一二	九七
同　南千住町	七	一四五
南足立郡千住町	三	一七
計	三六八戸	四、四六一人

木賃宿の許可區域は多く細民集團地區であるが、細民集團地區が震災の復興においてさきがけであつた如く、木賃宿の再建も各所ともめざましいものであつた。勿論、當座間にあはせのバラック建てのものが大部分であるが、中には普通旅館に比して何等遜色のないやうなものもないではない。

宿泊料は二十五錢から三十五錢が普通、一人あて疊一帖の割合ですしづけに寢せられる。大抵風呂はあるが、食事は外でとらなければならない。

一日十時間の激勞を終へてこゝに宿る人達は誰からもやさしい言葉一つかけられず、たゞ疲勞しきつた肉體を横へる半坪の面積をかうして與へられるだけである。愛する何ものも惠まれない——妻や子や親兄弟達が一所にゐないことは勿論、植木鉢一つ小鳥籠一つの愛玩品すら持つことを許されない生活に長くひたつて居る時、人間の心がどんな風になるか想像しても恐しい

ではないか。自由勞働者は、事實、かうした生活狀態に置かれてあるのだ。みだりにその捨鉢的態度を責める前に、先づ如實にこの事實に眼を向けなければなるまい。

簡易宿泊所

震災後政府委託の施設が二十ケ所も出來たので急かにその數を增し、本所區の九、淺草區の六を筆頭に今は四十ケ所の多きを算する。止宿人總數三、四一三人(大正十四年一月二十三日現在東京府社會課調査)の中、自由勞働者は二、六八四人であつて、木賃宿のそれに比して遙かに劣つて居るが、兎にも角にもこれだけの自由勞働者に簡易宿泊所が寢床を提供し得てゐることは喜ばしいと思ふ。

東京市營其他二三私設のものに可なりひどひバラック建のがあるが、政府委託の施設は、收容定員一〇〇人、工費三萬圓以上かゝつた相當なものである。宿泊料は十錢乃至二十錢、部屋は六疊八疊敷が多く、一人あて疊數一疊半位なの割合である。大抵公衆食堂が附設になつてゐるからもし定食だけですますなら朝食十錢辨當夕食各十五錢計四十錢でやつていけないことはない。尙附帶事業として共濟會、貯金、慰安會等をやつてゐる所も數多いことであるから、こゝに落着いて日傭勞働の不安定な生活から足を洗ふ算段を講ずべきだと信ずる。

四　自由勞働者の滯京年月

自由勞働著の移動の甚しいことは想像するに難くないが、左記東京府社會課調査(大正十四年一月二十三日現在)の結果が示す如く一ケ年以下までの者が實に三二パーセントの高率になつて居る。たゞ案外なのは十ケ年以上の滯京者が殆んど三ケ月以下の者と同率の一二パーセントを示してゐることである。

自由勞働者にとつての當面の急務は、共濟機能と職業紹介機能とを具備した自助的組合組織であると思ふが、かう移動が激しくてはこれは至難中の至難であらう。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

滯京年月	人員
三ケ月以下	九一五
六ケ月以下	五四一
一ケ年以下	八一五
二ケ年以下	六六三
三ケ年以下	二七一
四ケ年以下	三九七
五ケ年以下	二〇九
八ケ年以下	四〇九
十ケ年以下	二二二
十ケ年以上	八九三
不明	一、〇四五
東京出身	七六〇
計	七、一四五

五　自由勞働者の年齢

二十歳以上四十歳までの所謂男盛りの者が過半である。私共の宿泊所にも極めて稀には六十の坂を越えて尚自由勞働に從事して居る人が見えることがあるけれど、これは飛びはなれて身體の強健の者か、さもなくば極端な安賃銀で誰もやり手がないやうな仕事をそれも幾日目かに貰つて漸く暮してゐるといつたような人達かである。

それは兎に角として、自由勞働者の晩年を考へると暗い氣持ちに襲はれずにゐられない。彼等は何處に行くであらう。多年の勞働に鍛へられ、長い間の飲酒に燒けて、外觀上、筋骨逞しさうであり、赤銅色の顏面は病苦など更に應へぬやうに見えるが、五十からになつたかういふ人達の命は實に脆い。二三日病むと枯木でも折る如くまゐつてしまふ例がまゝある。こんな時、國もとへ紹介しても知人へ通知しても要領を得た返事のもらへることは滅多にない。僞名をしてゐたのか、『そんな人は更に存ぜぬ』とか、大變な不義理でもはたらいてゐたのか、『當方にかゝはりがない』とか言つて來られるのが十の七八である。

人生、死にあふより悲しきはないが、後事を託すべき何人も傍に侍るものなくして逝く人の

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

心事は如何であらうか？

　宿泊所經營者の會合の席などで、『どこそこの宿泊所では此間葬式を出した。』『私のところにも最近ありました。』といふやうな話のかはされるのを耳にする時、私はたまらない寂しさに囚はれる。

　左は東京府社會課の調査（大正十四年一月二十三月現在）である。

年齡	人員
十八歲以下	三七
二十歲以下	二二九
二十五歲以下	九四七
三十歲以下	一、二八四
四十歲以下	二、一三〇
五十歲以下	一、四一四
六十歲以下	七二三
六十歲以上	三五一
不明	二五
計	七、一四五

六　自由勞働者配偶者の有無

　長屋住居や間借りしてゐる自由勞働者の調査がないので、こゝに示し得る木賃宿、簡易宿泊所止宿者についての數字は、配偶者の有無に關する限り、全班を推測すべき規準とするには不適當だと思ふ。左表によれば有配偶者が九分强になつてるが、長屋住居の者を加算すると、いくらか割合が多くなるであらう。

　それにしても、十人の中、八九人といふものが獨身者のわけである。賣淫のことゝ結びつけて考へると、これだけでも由々しい社會問題でなければならない。私共のところ――『働く者の家』――では宿泊者の便宜のために貯金の世話をしてゐるが、五圓なり拾圓なりたまると、どこそこへ送金するの、何々を買ふのといふては下げてしまふ人が多い。これは、いふまでもなく、遊びに行くのである。一夜の歡を買ふために、かうして彼等を驅つて苦役十數日の汗の結晶を犧牲に供せしめる性慾てふものゝ不可思議には、今更ではないが、驚きあきれる外はない。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

話して見ればしつかりしたことを言ふ分別ざかりの男が、同宿者の小金まで無理算段して遊んで來て、しよんぼりしてゐる姿を見ると、私は暗然たらざるを得ない。これは、善いとか惡いとかいふて簡單に片付けてしまへる事でないので實に困つてしまふ。

左に配偶者の調査表を掲げよう。（大正十四年一月二十三日現在、東京府社會課調査）

配偶者の有無

年齢	有	無
十八歳以下		三七
二十歳以下	二	二二七
二十五歳以下	二七	九二〇
三十歳以下	七一	一、二一三
四十歳以下	二五〇	一、八八〇
五十歳以下	二〇七	一、二〇七
六十歳以下	八五	六三八
六十一歳以上	二二	三二九
不明		二五
計	六六四	六、四七六

七　自由勞働者出身府縣別

例により東京府社會課が木賃宿簡易宿泊所について調査（大正十四年一月二十三日現在）した結果を示さう。

府縣	人員	府縣	人員
東京	一、一三九	朝鮮	七九〇
千葉	三七〇	埼玉	三六八
新潟	三五六	長野	二六九
神奈川	二六三	茨城	二四九
群馬	二二二	栃木	一九七
福島	一八五	北海道	一六二
秋田	一四九	富山	一四二
靜岡	一三三	山形	一二八
大阪	一一〇	愛知	一〇四
山梨	一〇三	宮城	八六
石川	七九	兵庫	七八
福岡	七七	青森	六三
廣島	六一		

（以下省略これは七、一四五八人についての調査である。）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

尚、出稼と居付とを別ければ

	木賃宿止宿者	簡易宿泊所止宿者	計
出稼	一、七三八	七三一	二、四六九
居付	二、七七八	一、八九三	四、六七一

八　自由勞働者の賃銀

私共の宿泊所の附設食堂で止宿人と夕食を共にしながらの對話——

『此頃はどこです？』

『づーっと、復興局ですが、何だか頸になりそうです。』

『仕事がやめになるのですか？』

『いゝえ。今壹圓八拾錢もらつてゐますが、請負人が何でも壹圓三拾錢とかにせつて來てゐるのでその方に仕事をとられさうだと職業紹介所で言つてました。』

何人によつても何日でも極めて容易に置きかへられること自由勞働者の如きはないだらう。

產業豫備軍は常に彼等の背後に控へてゐる、或は彼等自身が產業豫備軍であるといつた方が一層適當であるかも知れない。彼等の賃銀には相場があつてないやうなものである。今日貳圓のものが明日壹圓七拾錢になり明後日は壹圓五拾錢に下落することは稀ならずある。一日々々仕事の種類も場所も傭主もかはるのが自由勞働者の自由勞働者たる所以であるので、饑餓に驅らるればどんな安値にでもその唯一の所有たる勞働力を賣つて露命をつながねばならない。賃銀鐵則が、最近の經濟學でどう取扱はれやうと、こゝにはその打消すべからざる實例が見られる。

コンクリートの仕事や車力などにまわると、參圓にも五圓にもなることがあるけれど、これは普通の體格では勤まらない。此頃の物價とすれば、やはり壹圓五拾錢から壹圓八拾錢位が大體の標準らしく、一ヶ月中二十日仕事があるとして月收參拾圓乃至參拾四五圓になり、どうかこうかやつて行かれる程のものである。

詳しくは左表參照。

木賃宿簡易宿泊所　止宿自由勞働者賃銀表

（大正十四年一月二十三日現在　東京府社會課調查）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

賃銀	人員	百分比
八〇錢以下	一七三	四・四一
一圓以下	二一四	五・七一
一・二〇圓以下	二二一	五・六三
一・五〇圓以下	七三五	一八・四五
一・八〇圓以下	八二三	二一・一〇
二圓以下	七二四	一八・四五
二・五〇圓以下	六〇一	一五・三二
三圓以下	一九二	四・八九
三圓以上	九九	二・五二
不明	一二七	三・二四
計	三、九二四	一〇〇・〇〇

九　自由勞働の失業者

平常時に於ても、自由勞働者の就業日數は一月中二十日前後とされて居り即ち三日のうち二日しか仕事をしないわけであるが毎年十二月中旬から一月二月にかけては仕事が期節や豫算の關係上著しく減少するので就業率は事情を知らない者の信ぜられないまでに低下する。本年の如きは實に極端であつて歲暮から一月中旬までといふもの、私共の宿泊所では日々七〇パーセントの失業者があり、二日も三日もロク／＼食物らしいものを口にすることの出來ない人達が隨分あつたので、私共も思ひにあまり一月十日であつたか宿泊人と憂を共にする意味で斷食していのりを捧げたことがあつた。

左に東京府社會課が大正十四年一月二十三日に管內の木賃宿簡易宿泊所について一齊調査をした結果を引用しよう。

就業不就業人員調査表

	人員	百分比
就業者	三、九二四	五四・九六
失業者	二、八七四	四〇・二五
病者其他	三三〇	四・六二
不明	一二	〇・一七
計	七、一四〇	一〇〇・〇〇

不就業期間調査表

日數	人員	百分比
三日以下	七九二人	二三・六九
五日以下	三六一	一一・二二
十日以下	五五四	一七・二二
十五日以下	四七六	一四・七七
二十一日以下	三六六	一一・三八
不明	一九二	六・九二
計	三、二一六	一〇〇・〇〇

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

世に不合理のことは多いけれど、働く意志と能力のある者が働く事が出來ず饑餓に迫られてゐるほどその甚だしきはあるまい。個人〳〵につき詳しく調べて見ればかうした憂目にあはされる人達には、それ相當の原因のあるものが多いが、食べる食べられぬの問題を目のあたりにしては、徒らに責任論を云々するもそのかひがなからう。

十　自由勞働問題の對策

先づ當面の急務として、職業紹介機能と共濟機能とを具備する自助的組合の組織を要望せざるを得ない。この事は移動のはげしい自由勞働者にとつて至難中の至難であるには相違ないが、組合の組織によつてその移動を幾らづゝでも緩和するやうにし、よつて以て生活の安定を計る基礎を築くことが第一義だと信ずる。

一方また日傭勞働專門の職業紹介所を擴張充實して、從來官公廳人夫傭入の習はしである請負制度を廢止し職業紹介所を通して直接自由勞働者組合に全部仕事を與へることにしたい。

又、毎年十二月から一月、二月にかけては、きまつて失業者が續出するのであるから、豫め官公廳で仕事を按配すると共に組合側でも預金を奬勵するなり何なりして之に備ふるところなればなるまい。

若し叶ふべくんば、國營繼續事業として全國的道路網の建設、大規模な義務勞働制の國營授產場の開設、更に失業保險の制定まで望みたいが、現下の我が國情としてその實施を期しがたいのを遺憾とする。

次ぎに自由勞働者の宿所であるが、簡易宿泊所が四十ケ所あつたゞけでは、まだ〳〵少ない。生活環境が如何に大なる支配力を人間に及ぼすものなるかを思へば、木賃宿と細民集團地區とは一日も早く撤廢を見るやう望まざるを得ない。これらに代つて、食堂もあり娯樂敎養の機關も備はつた簡易宿泊所が、自由勞働者大多數の需要を充たし得る程に建設されるなら、のだつ人はのだてるし、性格的に自由勞働しかやり得なくなつて來てゐる人達のみが殘されることになり、自由勞働者の數も漸減して行けばその質も自然向上されるであらう。

（筆者不德無學の身をもつて、去る五月二十七日畏くも　東伏見宮妃殿下のお召しにあづかり、平生關心の社會事業について言上を許さるゝの光榮に浴するを得、　妃殿下が社會の福祉に對する篤き御祈りのほどを拜察し奉りて、不敏ながら深く覺悟するところありたり。右の一文はその折携へたる資料を基として書綴れるものなり。一四・六・二〇謹記）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

謹告

拜啓　同人機關誌『光』は從來東京宣光社名義にて發行致居候處今度宣光社の組織を改め發行及編輯の事務分擔を左記の通りに變更いたし候間さやう御諒承たまはりたく此段謹告仕候　頓首

大正十四年二月

伊藤猛　西田天香
西田保太郎　小此木渾沌
中桐確太郎　松下吉衞
（いろは順）

發行兼印刷人　京都市烏丸頭小山下總町五　回光社内　西田保太郎
振替　大阪五九八三九　東京五七六七一

編輯人　東京市本所區林町二ノ七八　松下吉衞

附記
誌代は　京都市　回光社へ
玉稿は　東京市　松下吉衞へ

編輯人から

本誌わ一燈園の同人光友の機關誌たると共に、一燈園生活そのものに對する自由眞摯な評壇たる使命を擔いたいと思います。もとよりこれ論を好むがためにあらず、吾等が本願の成就を祈ればのこと。されば、掲載記事に對する異見わ皆さんから腹藏なく發表していたゞき、私共の生活を、この方面からも錬りに錬つて、獨斷論に禍されることのない生命力の溢つたもの、最も嚴正な意味の批判に堪えるものに磨き上げ、人類愛の生活化と社會的正義の確保と兼ねて文化諸相の調整とに聊か貢獻したいと願つています。（松下）

定價　一ヶ月分　金二十錢　一ヶ年分　金二圓四十錢（郵稅共）

大正十四年七月五日印刷納本
大正十四年七月九日發行　（第四十三輯）

發行兼印刷人　京都市烏丸頭小山下總町五　回光社内　西田保太郎

編輯人　東京市本所區林町二ノ七八　松下吉衞

發行所　京都市烏丸頭小山下總町五番地　回光社
振替　大阪五九八三九　東京五七六七一

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

光の友パンフレット

No.1 入　牢　の　心　を（西田天香著）12錢

No.2 時 代 苦 を 苦 し む（松下吉衞著）20錢

No.3 復興改建の精神的基礎（中桐確太郎 小此木渾沌著）20錢

No.4 一 燈 園 生 活 問 答（松下吉衞著）近刊

發 行 所

働 く 者 の 家

東京●本所●林町二ノ七八

〔送 金 郵 劵 結 構〕

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN